

第7回 デカルト

- | | | |
|------|--|----------------------------|
| 1 A | 知識や認識の源泉を理性に求め、感覚的経験を重視しない思想的立場を何というか。 | 合理論 |
| 2 A | スコラ哲学を批判して新たな学問の方法を確立するとともに、近代的自我の発見をももたらした、大陸合理論の祖であり数学者でもある人物は誰か。 | デカルト |
| 3 A | 学問の方法と形而上学・自然学の基礎を論じたデカルトの著書を何というか。 | 『方法序説』 |
| 4 A | 神と精神の存在証明および物心二元論を論じたデカルトの著書を何というか。 | 『省察』 |
| 5 B | 理性と同義語で、デカルトが「この世でもっとも公平に配分されている」と語った真偽の弁別・判断能力を何というか。 | 良識 |
| 6 A | デカルトのとった方法で疑うことのできない真理を得るために、方法として疑ってみることを何というか。 | 方法的懐疑 |
| 7 A | すべてを疑ってみても、疑いつつある自分は存在しているという、デカルト哲学の第一原理を何というか。 | 「われ思う、ゆえにわれあり(コギト＝エルゴ＝スム)」 |
| 8 B | 思惟を属性とする精神と、延長を属性とする物体とを二つの実体とするデカルトの考えを何というか。 | 物心二元論 |
| 9 B | 自然現象は物体とその運動からなりたち、その法則は機械的・数学的な因果関係によって説明されるという、目的論的自然観と対比される考え方を何というか。 | 機械論的自然観 |
| 10 A | 自己とは肉体をもふくめた自分を自分と認識する意識主体にほかならないとする、デカルトの自我の考え方を何というか。 | 近代的自我 |
| 11 C | いっぽんには感情にともなって生じるさまざまな思いをさすが、デカルトが驚き・愛・憎しみ・欲望・喜び・悲しみを基本的なあり方と考えた精神の状態を何というか。 | 情念 |
| 12 C | デカルトが驚き・愛・憎しみ・欲望・喜び・悲しみを基本的なあり方と考えた精神の状態を自己統御し、身体にとらわれず自由で能動的な生き方を可能にする精神を何というか。 | 高邁の精神 |
| 13 A | 普遍的な真理を前提として、そこから論理的に結論を導きだす推論の方法を何というか。 | 演繹法 |
| 14 B | 精神と物体とは二つの実体ではなく、ともに唯一の実体である神の属性にすぎないと考えたオランダの哲学者は誰か。 | スピノザ |
| 15 C | 幾何学的方法によって記述されたという、神は唯一絶対の実体であり、自然即神であるという汎神論を展開したスピノザの著書を何というか。 | 『エチカ』 |
| 16 B | 世界は前もって神によって設定された調和のなかにあるという、予定調和説を説いたドイツの哲学者は誰か。 | ライプニッツ |
| 17 C | 分割不可能な実体で非物質的な万物の構成要素(单子＝モノアド)について語られたライプニッツの著書を何というか。 | 『单子論』 |